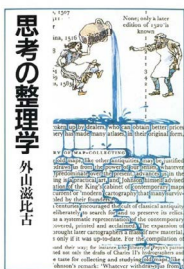




bowie15/iStock/Thinkstock

# 思考の整理学



著者：外山 滋比古

定価：562 円

文庫：232 ページ

出版社：筑摩書房

(1986/04/24)

評点 (5 点満点)

総合	革新性	明瞭性	応用性
4.2	3.5	4.5	4.5

## 要約者レビュー

30年間で200万部以上売れたロングセラー、それが『思考の整理学』である。毎年多くの学生が購入している本書であるが、たんなる学生向けとあなどるなかれ。ここには「思考」の本質が描かれている。

日本人はよく「表現することが苦手」と言われるが、それは実のところ、「考えることが苦手」ということに他ならない。考えることが得意になるためには、著者のように思考の「整理」が必要だ。30年以上前に書かれていた本ではあるが、著者の考え方は今でも十分新鮮である。ここに書かれていることを実践すれば、思考の質が変わっていくのを実感できるはずだ。

また、エッセイ集として読んでも単純に面白い。90歳を過ぎた今もなお、エッセイストとして活躍する著者だが、その実力は本書からも読みとることができる。なによりメタファーの使いかたにグッとくる。人間の感性に訴えかける表現にあふれているからこそ、本書は今日まで読み継がれているといえる。

「知」という営みに対する向き合い方を考えるうえで、まさに礎となる一冊である。本書の帯には「もっと若い時に読んでいれば……」と書かれているが、読むのに遅すぎるということはない。まだ読んでことがないという方も、学生時代に読んでことがあるという方も、これを機会にぜひ本書を手にとってみてはいかがだろうか。(石渡 翔)

## ■ 本書の要点

- ・学校教育は、自力で飛び立てないグライダー人間ばかり生みだしてきた。だがこれからの時代が必要とされるのは、自力で飛び回れる飛行機人間である。
- ・思考を整理するうえで、寝かせることほど大事なことはない。
- ・本当にやるべきことは、1つのことだけに注力しているとなかなか見えてこない。
- ・知識をいたずらに所蔵してはいけない。必要なものの以外は忘れてしまうべきだ。
- ・深く考えず、とにかく気軽に書き始めたほうがいい。そうすれば道筋が見えてくる。

## 要約本文

学習について

**グ**ライダーかつ飛行機である

学校信仰というものがある。新しいことを始めたいのであれば、学校へ行くのが一番だとする考え方のことだ。学校信仰をもっている人たちは、学ぶには

まず教えてくれる人が必要だと考えている。だからこそ、教える人と本を用意して待つてくれる学校へ行くのが当然だというわけである。

だが、学校での学びは、あくまで先生と教科書にひっぱられたものでしかない。それはまるでグライダーのような学び方だ。学校では、どこまでもついでいく従順さが尊重され、逆に自力で動く飛行機のような学び方は敬遠されてしまう。

もちろん、グライダー能力自体がダメなわけではない。そもそも人間には、グライダー能力と飛行機能力の両方が備わっている。グライダー能力がまったくなければ、基本的な知識の習得すらおぼつかないだろう。何も知らないまま一人で飛ぼうとすれば、待っているのは悲惨な結末である。

## 学

習は逆説的である

だが、現実にはグライダー能力ばかり成長していて、飛行機能力に欠けている人があまりに多い。さらに悪いことに、そういう人も「翔べる」という評価を社会で受けてしまっている。そのような環境が、新しい文化の創造を阻んでいるのだ。

学校がグライダー訓練所のようになってしまうのも、考えてみれば当然である。とにかく言われるまま勉強するような教えこむからだ。そのような環境では、各人の自発的な学習意欲は期待できない。

ここで参考になるのが、昔の塾や道場のしきたりである。かつての教育機関では、入門してもすぐに教えるようなことはしなかった。むしろ、教えるのを拒んでいたほどである。すると当然、弟子は不満をいだき、なんとしたとしても師匠の知識や技術を盗みとろうとする。すると次第に、新しい知識や情報を自ら取得する力が養われていくとい



ipopba/iStock/Thinkstock



うわけだ。

いまの学校は、教える側が積極的すぎるし親切すぎる。それでは学ぶ側の依存心を助長するだけで、好奇心をないがしろにしてしまうだけである。

【必読ポイント！】発想について

## 問題

通常、問題から答え

が導かれるまでには時間がかかるものだ。その間、ずっと考え続けているのはかえって悪影響を及ぼしかねない。一晚寝てから考えるぐらいがちょうどよい。

むしろ、一晚では短すぎる場合もある。大きな問題は特にそうだ。すぐに答えが出るような問題は、そもそも大したことがない。本当の大問題は、長い間、心のなかであたたためておかないと形をなさない。

思考の整理法として、寝かせることほど大切なことはない。意志の力には限界がある。もっとと無意識の時間を大事にするべ

きである。着想を生み出すうえで、無意識の時間を使うことほど有用な手段は他にない。

## ひとつだけでは、多すぎる

自分なりの着想をもつと、どうしても独善的になりがちだ。もちろん自信をもつことはすばらしい。だが、いきすぎたままではいけない。ひとつのことに注力することは、傍目には美しい生き方のように思えるかもしれないが、かならずしも成果に結びつくわけではな



Sphotography/iStock/Thinkstock

い。ひとつだけに絞ってしまうと、うまくいかないときに後がなくなってしまう危険性もある。

いくつかのことに関わりをもつて生きてこそ、自分のやるべきことが見えてくる。また、変なこだわりも生まれないし、力むこともなくなる。自分のテーマ同士を競争させていれば、テーマの方から自然と近づいてきてくれるものである。「ひとつだけでは、多すぎる」のである。

## 知のエディタースhipとは

全体は部分の総和にあらず、という言葉がある。上手に編集すれば、部分の総和よりはるかにおもしろい全体像を描き出せるし、それぞれの構成要素も単独のときより数段見栄えがよくなる。

もともになるものを生み出すところが第一次的創造（クリエイション）であれば、それらをまとめあげるのが第二次的創造（メタ・クリエイション）である。

第二次的創造が第一次的創造に比べて劣るものでないことは、スポーツの監督やファッションデザイナー、映画やテレビのディレクターの役割を見れば一目瞭然であろう。

思考においても、第一次的創造と第二次的創造がある。思いつきや着想のような第一次的創造は、それ単独で意味をもつこともあるが、単独ではさほど力をもっていないことも少なくない。

そこで「知のエディタースhip」、すなわち第二次的創造の出番である。ここで求められるのは、もっている着想や知識をいかに組み合わせるかだ。このとき、材料は自分の着想でなくともかまわない。自分自身がどのくらい独創的であるかは、知のエディタースhipにおいてはさほど重要ではない。むしろ、あまり主観や個性を出しすぎるのは考えものだ。知を紡ぐ際は、あくまで触媒としての役割に徹するべきである。

忘却について

## 積ん読ではなく「つんどく」 を

知識をあつめるときに大切なのは、系統的に収集することだ。おもしろそうなことをかたつぱしから集めてしまっても、雑然と知識が積み上がるだけで、調べる前よりもかえって頭が混乱してしまふ。調べるときは、まず何を調べるのか明確にするべきだ。

ものを調べるときは一般的に、カードあるいはノートを用いることが多い。だが、どちらも時間がかかるし、アフターケアも大変だ。よほどうまく管理しなければ、山のような「資料」をかかえることになってしまふ。

そこでおすすめしたいのが「つんどく法」だ。すなわち、当たって砕けるの精神で、積み上げた参考文献を、一気に読み進めるのである。メモ程度のことを書くのはかまわないが、ノートやカードは極力とらない



kurmyshov/iStock/Thinkstock

その後はどんどん楽になるはずだ。読み終えたら、なるべく早くまとめの文章を書こう。ほとぼりが冷めてしまふと、一気に忘却が進んでしまふ。

つんどく法のカギは、集中読書と集中記憶だ。そうすることによって、短期間、ある問題に関して博覧強記の人間になる。そしてそれをアウトプットしたら、安心して忘れる。それでも、いくつかのことは頭に残るだろう。いつまでも忘れないようにと思っていると、後々の知識の習得の邪魔になるので、注意が必要だ。

## 倉庫ではなく工場になれ

思考の整理で重要なのは、いかにうまく忘れるか、である。

私たちは、人間の頭脳を「倉庫」に見立てた教育を受けてきた。倉庫としての頭にとつて、忘却は敵だ。この考えにしたがえば、なかにたくさんのものが詰まっていればいるほどよいということになる。

だが、コンピュータが普及したことによって、人間の頭を倉庫として用いるやり方に疑問が生じてきた。これからは、新しいことを考え出す「工場」でなくてはならない。倉庫を工場にするには、よけいなものは処分してしまい、広大なスペースが必要だ。かといって、すべてのものを捨ててしまつては仕事にならない。そこで整理が大事になる。

この工場の整理に当たるのが、忘却である。特に大事なのが、睡眠のもつ忘却機能だ。朝の時間が、思考にとつて黄金の時間なのも、頭のなかの工場がきちんと整理されて、動きやすくなっているからに他ならない。また、場所を変えてリフレッシュしたり、他のことをしてみたりするのも効果的である。朝から晩まで同じ問題に取り組んでいるようでは効率が悪い。

表現について

## とにかく書くべし

考えをまとめるのはた



いへんな作業だ。だが、まとめることなしに本を読み続けても、材料がいたずらに増えるだけである。大変な勉強家でありながら、ほとんどまとまった仕事を残すことができない人間になりかねない。

大事なのは「気軽に」書き始めることだ。最初から大長編を書こうとしてはいけない。力が入ると文章が上滑りしてしまう。いいものを書こうと気負わずに書くべきだ。これは論文だけでなく、報告書やレポートにも同じことがいえる。

おもしろいことに、とにかく書き出してみると、頭のなかで少しずつ筋道が立ってくる。どういう順序で書こうかと迷ってはならない。道筋は書き進めていくうちに自然と見えてくるものだ。

また、こまかい表現にこだわるとよくない。ノロノロ走っている、石ころひとつで横転しかねない。全速力で走り続けよう。そうすれば、すこしくら

いの障害など気にならなくなる。推敲は最後にすればいい。

## アイディアは話すな

声に出してみると、頭が違ったはたらきをするようにだ。原稿は黙って書いたほうがいいが、読みかえすときは音読したほうがいい。すくなくとも、声に出すつもりで読むべきだ。そちらのほうがはるかに文章の穴を見つけられる。

とはいえ、なんでも声に出せばいいというわけではない。た



VladimirFLoyd/iStock/Thinkstock

とえば、ちょっとしたアイディアを思いついたとする。つい友人に話したくなるところだが、話すのは厳禁だ。大抵の場合、がっかりするような反応しか得られず、意気消沈することになる。

また、話すと途端に溜飲が下がり、考え続けようという意欲を失ってしまう危険性が生まれる。しゃべるといえるのは、それだけで立派な表現活動だ。創作へのエネルギーはとにかく代償行動で肩代わりされやすい。大切なアイディアであれば、あえて黙っておいたほうがいい。

### 発見について

## 話し合うべきは異分野の人である

同じ方面のことを専攻にしている人たちが話し合うと、どうしても話が小さくなりがちである。便利な知識を得るためにはいいかもしれないが、そこから本当におもしろいことは飛び出してこない。

新しい発見は、気心が知れて

いて、なおかつなるべく縁の薄いことをしている人たちが集まって、現実離れをした話をしているときに生まれるものである。そういうときは思考も躍動的になり、時を忘れて語り合ってしまう。

このように、異なる専門をもっている人が集まって、なんでも話し合う方式のことを著者は「ロータリー方式」と呼んでいる。生物学的にインブリーディング（近親交配）がよろしくないとするれば、知的な分野においても同様のことが言えるはずだ。

一読の薦め…ロボット時代の到来にしたがい、これからますます「考える」ことの重要性が高まってくるだろう。「自由に考えること」のむずかしさを痛感している人にこそ、ぜひとも読んでいただきたい名著である。

著者情報…

外山 滋比古（とやま しげひこ）

1923年生まれ。東京文理科大学英文科卒業。お茶の水女子大学名誉教授。専攻の英文学に始まり、テキスト、レトリック、読書、読書論、エディタースhip、思考、さらに日本語論の分野で、独創的な仕事を続けている。平明で論理的な日本語を開拓したエッセイストとしても定評がある。著書に『「読み」の整理学』『ライフワークの思想』『アイディアのレッスン』『知的創造のヒント』『知的生活習慣』（筑摩書房）など多数。

Copyright © 2017 Flier Inc. All Rights Reserved.

本文およびデータ等の著作権を含む知的所有権は株式会社フライヤーに帰属し、事前に株式会社フライヤーへの書面による承諾を得ることなく本資料およびその複製物に修正・加工することは堅く禁じられています。また、本資料およびその複製物を送信、複製および配布・譲渡することは堅く禁じられています。